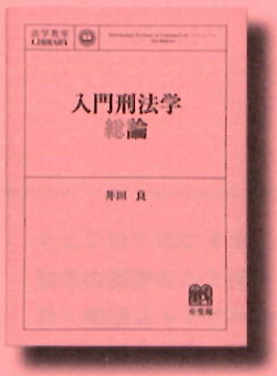
学生に読ませたい本

加藤　正明



①井田良『**入門刑法学・総論（法学教室ライブラリィ）**』（有斐閣、2013年）

刑法学に限らず、学問とは、複雑な内容ながら、体系性をもっているものである。体系性というのは、ある個別論点につき「なぜそのように考えるのか」を問うたときに、その解答が基本原理のレベルでの立場選択に帰着することだが、これを会得するためには、個別論点を学ぶ前に全体像をおおまかに把握しておくとよい。そこで、学問全体がコンパクトにまとめられた概説書があると便利なのだが、本書はまさにそれにあたる。

著者は、間違いなくこの四半世紀を代表する刑法学者であり、平易な語り口に定評がある。ただ、本書は、「はしがき」に述べられているとおり、専門書を「相当に密度濃く凝縮した本」となっており、初学者が一読して全部を理解するのは困難である。難しいところは読み飛ばしていいので、「ひととおり読んでみること」をお勧めする。

加えて、本書には著者の見解も散りばめられている。この点は評価が分かれるところかもしれない。利用方法としては、講義の復習をする時に、著者の見解を抜き出してみて、著者の見解を支持するかどうか、支持する、あるいは支持しないとして、その理由を考えてみてほしい。そうすることで、理解がより深まることと思う。

②フランス・ドゥ・ヴァール（柴田裕之訳）
『**道徳性の起源　ボノボが教えてくれること**』（紀伊國屋書店、2014年）

刑法学は学説の対立が激しいといわれるが、対立軸は、刑罰の存在意義について、刑罰を過去の悪行に対する報いととらえるか、それとも、将来に同様の加害行為に出ないようにするための手段ととらえるかにある。現在の学説は、「法と道徳を分離すべきだ」として、後者の立場をとるのが多数を占める。けれども、そこで念頭に置かれている「道徳」は伝統的価値観という程度のものでしかなく、道徳についての理解が欠如しているように思われる。

道徳とは、良心の働きに従って善悪を区別することであるが、「良心」というのは道徳的判断に関する心の働きを理論化したもので、いろいろな考えかたがある。

著者は動物、とりわけ霊長類の行動観察から、動物にも他者への共感にもとづき、道徳的な振舞いが可能であるとかねてより主張してきた。本書でもその主張が繰り返されている。

本書は、さらに進んで、道徳性における人間と動物のちがいがどこにあるかにも言及している。著者の結論は、個体をこえた「コミュニティへの気遣い」が高度に発達したことがそれだというものである。

本書は動物の行動観察を豊富に取り揃えているだけでなく、機知に富んだ叙述で読者を飽きさせない。ぜひ読んでみてほしい。